

學 術 と 人 生 (三)

英國ローヤル學會員

サー・リチャード・グレゴリ

アラートスの天文詩（天界第六十一號から第六十七號までに連載）は昔から諸國の學者たちに嘆詠されたものです。使徒パウロがギリシャ傳道の途中、アテネのアレオ丘上で多くの學者たちに道を説いた時、『……爾等の詩人たちも「我等は其の裔なり」と言ひしが如し……』使徒行傳一七三八）と言ひました。此のパウロの言葉はアラートスの詩の本文と非常に近いものです。シセロや其の他の學者も此のアラートスの詩をラテン語に譯しましたし、ヴァージルの他のローマの詩人たちも、屢々アラートスの詩のことを書きました。ヴァージルは彼の有名な「ジヨージクス」といふ詩の中に、一年中の季節によつて空に見える星座と農業との關係を記して、人生と自然界との交渉を紹介してゐます。又、同じ頃、ルクレチウスは「天然の事象について」といふ著述を發表し、この地上から見た天象の模様を書いて居りますが、しかし更に驚くべきは、今日

の物質原子論と其の宇宙關係のやうなものを彼が豫言してゐることでありま
す。彼は天然の現象や其の法則を、神の力によらず、只、人智の理論のみによ
つて解説しやうと試みたのでした。

第九世紀から第十四世紀頃までの間、天然界の研究はアラビヤ人たちが見事
にやつてのけましたが、其の時も、アラビヤ人は天文學を熱心に研究し、後世
其れは廣く讀まれました。第十一世紀の後半に居たオマール・カイヤムは詩人
であると同時に、天文學者でありまして、其の著書「ルバイヤト」の中には若
干の天文記事があります。彼の時代はアラビヤ學術の黃金時代でした。次ぎの
時代の大詩人はダンテで、其の詩の中には、當時の理學知識を詳細に、又、正
確に應用しました。ダンテが記した天體運行の知識は、第九世紀の初めに多く
の著書を遺したアラビヤの天文學者アルフラガヌスから獲たものです。チヨ
ーサーも亦天文詩人の一人で、やはりアラビヤの天文學から多くの種を獲ました。
彼れは主として天文と人生の關係の觀點から天體現象を多く記した最初の英詩
人でした。

ダンテから三百年後、ミルトンは其の「失樂園」の詩の中に夥しく天文現象を記しました。ミルトンはガリレオに會つたことがありまして、このガリレオの月や銀河の觀測のことを書いてゐます。ミルトンはコペルニクの地動説がガリレオの觀測によつて確立されたことも知つてゐて、當時、世間一般に信ぜられてゐた天動説と、新しい地動説との違ひなぞ書いたこともあるのですが、しかし彼自身が其の何れを信じてゐるかは明瞭に言ひませんでした。フランシス・ベーコンでさへ、友人の中に地動説を信じてゐる學者や智識人を多く有つてゐながら、自身は頑固に天動説の味方でした。ベーコンが『新機構』を著したのは地動説が世に現はれてから八十年も後でしたし、其の書中に彼は天文學の研究方法について立ち入つた評論も試みてゐるのですが、それでも彼れ自身はコペルニク説に賛成しないで、自ら獨特な宇宙觀を工夫したりしました。ガリレオが木星の衛星を發見した西紀一六〇九年と言へば、ベーコンの死から十七年前に過ぎないのですが、その時でも彼は地球が太陽のまはりを年週公轉するといふやうなコペルニク説には反對してゐました。彼のやうに博學で、理學

の進歩發達を人に教へるべき地位の哲學者が、地動説の如き簡單な宇宙解説に賛意を示さなかつたのは不幸なことでした。しかし、之れは、當時、カトリク派やプロテスタント派の如き宗教上の先入觀念に囚はれない人々でさへ有つてゐた態度であつたのです。

地動説に賛成することは即ち地球と人類とが宇宙の中心だといふ信仰の根底を棄てる意味なのでした。後年ニウトンが、諸遊星のみならず彗星の運行なども皆引力法則で充分に説明し得るものであることを立證しましたので、もはや此等の天象は人類を警醒する兆候と考へるのは不合理となりました。かやうにして、智識の進歩と、天然の諸法則の確認による正義感とが、深く人の思想に影響し、文化的の意義大なる社會變化を齎すことゝなつたのであります。

同様な思想の變化は、コペルニクから三百年して、人類と他の生物との關係が新しく見出され、進化の系統が明らかになつた時にも起りました。進化論は、生命に新しい希望を與へ、過去よりも未來への憧憬を生むことゝなりました。即ち、ホクスリーに據れば、進化論は、肉體の進歩と共に、社會や倫理標準の發

達を教へます。従つて人種や宗教上から他民族以上に優越性を感じ、力に訴へても其の發展を實現しやうとする國民は、言はゞ野性に後退し、人類の進歩を妨げるものであります。

理學の唯一の目的が、只、天然界の事實や原則を發見するのみで、其れの社會生活への意義が無いといふ觀念は、今後、通用しますまい。今日一般に認められるところは、理學と倫理とが無關係であり得ないこと、例へば、學術上の諸發見が、戰時には破壊の目的に用ひられ、平和の際には經濟變動を呼び起すことの責任から免れられません。理學者は、自身が提供した素材で建設され、又は其の成し遂げた諸發見によつて破壊される此の人類社會機構の諸問題に對して、無責任であることは出来ません。彼等が人類に提供した豊源の亂用によつて混亂の世界から理想と調和の社會秩序を取り戻すことは彼等の義務であります。理學は現代の交通々信機能を通じて、世界を合一しました。もはや智識の世界では政治や人種の境界を認めません。此の智識を善用すれば、今や塵や灰の漲らうとする此の汚れた世界を一轉して天の理想國に化することも出来るでせう。

(終)